

「県外視察報告書」

報告者：高木かおる

視察期間：平成31年2月5日（火）～6日（水）

視察先：大阪市 府立西成高校（5日）、市立玉出小学校（6日午前中）、市立大空小学校（6日午後）

***** *

（報告）

2日間にかけて、高校1校、小学校2校を視察しました。それぞれの学校で、「子どもの実態」を捉える学校の視点が土台としてあり、そこからどのような教育的な支援が必要かを考えている、という感想を得ました。児童・生徒が学校の教育目標にかなうように支援・指導していく形ではなく、「子どもの実態」から再考し続けている点に驚嘆しました。

まず府立西成高校には、2か所の校内カフェがありました。運営は外部委託されており、委託先と学校側が、生徒をまんなかに深く連携を取っていました。委託先は、社会福祉法人やNPO法人であり、西成高校と以前からの協力関係にあった実績もあり、連携は非常に密でした。ただ生徒に居場所を提供するだけではなく、「子どもの実態」を捉え、社会的な支援と学校現場での支援とに分けての協働作業は、まさに学校をプラットフォーム化し、社会資源との連携を模索してきた実践の一つであったと、その歩みの深さを感じました。「（西成高校の学びはいわゆる）学び直しではない」と温和な表情で語られる校長は再任用校長（現役での校長体験あり）でもあり、誰よりも西成高校の実態をつかんでいる方でした。生徒たちはこれまでの人生で、「学ぶ機会を与えられなかった」のであり、「つかむことのできなかつたチャンスをもう一度捉え直す」ことで18歳のスタートラインに立てると確信を持たれていました。また校内カフェの運営者側が、生徒の心の声をさり気なく「掬い」、その声から生徒の求めている「救い」を見出し、生徒の守られるべき人権をしっかりと認識しながら支援している姿勢は、やはり専門性の高いものであり、学校側にはできないような高度に専門的な運営がされていることも実感しました。

次に玉出小学校では、「学びから逃げない子どもの育成」（昨年度）から「学びに進む子どもの育成」（今年度）という教育目標をもとに、「玉出スタンダード」として「時間を守る・物を大切に作る・あいさつをする」の徹底を進め、さらに「決心千回」を合言葉に授業を展開していました。決心千回とは、千回挑戦してみれば999回はダメでも1回は上手くいくかもしれないよ、と子どもたちのやる気を引き出すために現校長が児童にかけている合言葉でした。子どもたちへの浸透も、深いものでありました。子どもたちが学ぶ主体者となるために、学校力UPコラボレーターを配置し、その高い専門性を通して、子どもたちの習熟度を高めていく取組は、教師の授業力アップを目指す上でも意義深いものだと感じました。

最後に大空小学校についてですが、休み時間に到着したこともあり、子どもたちが元気に遊んでいて、先生の姿がその中に溶け込むようでありました。大空小では「みんながつくる みんなの学校 大空小」というテーマの下、たった一つの約束「自分がされていやことは人にしない 言わない」を大人（教師や訪れる方）も守るべきこととして捉えていました。「みんなで」ではなく、「みんなが」としたところに大空小が、いかに子どもたちを権利の主体者として捉え教育実践をされているのを感じました。それは学びの主体者は、子どもたちなのだという、教育の原点を感じさせられるものでもありました。

「すべての子どもを多方面から見つめ、全教職員のチーム力で育てる」という視点どおり、授業に入らずに校庭で勝手に遊んでいる児童に、通りがかった教員がさり気なく声をかけ、担任と気づいた様子を語り合っている姿が見られました。そして、何よりも学校が地域に開かれていて、多くの来校者が学校に「近い存在」（＝サポーター）として、多種多様な形で連携をしていました。特に授業参観はいつでもOKで、時間があれば「インターホン」を鳴らし、（ぶらっと）学校に入り、そして（ずっと）授

業の中に入れてもらい、(そっと) 子どもに寄り添ってもらうことを実践していました。PTA活動も、「できる人が できる時に 無理なく 楽しく」をモットーに「全ての子どもを 全てのサポーターで 育む」として、

S (Supporter) E (Educator) A (Association) 活動として学校と深い連携をしていました。Eの教員だけではなく、Sの保護者・地域の方がいかに関わっていくのかを、「それを無理なく」「できる人が」としたところに、現実をしっかりと踏まえた活動視点があると感じました。

今回の県外視察を通し、宮崎県も進めるコミュニティー・スクールにおいて、まずは「子どもたちの実態」をしっかりと捉え直し、地域と子どもたちをまんなかにした学校のプラットホーム化の実現を目指し、固定化されているかもしれない子ども観を見直し、宮崎の実態にあった実践につなげていければと切望するところです。